

『教授』と『ヴィレット』

篠 三知雄

はじめに

表題の2編の小説は、いうまでもなく、ブロンテ姉妹の一番年長であるシャーロット・ブロンテの作品である。英文学に関心のある者にとって、ブロンテ姉妹の小説群は、主なもの、7編と、数こそ少ないが、無視できぬ存在で、J. オースチン、C. ディッケンズ、J. コンラッド、J. ジョイス、D. H. ロレンスなどと並んで、シェイクスピアに次いで多くの研究が発表されていることであろう。

この小論は、特に表記の2作品について論ずるものであるが、ほんの一步の歩み出しに過ぎない。したがって、ここで述べていることの多くは、すでに論じられていることであろう。事実、多くの考えを他の研究者に負っている。

しかし、多くの研究者にとってと同様、筆者にとっても、ブロンテ姉妹は避けては通れぬ存在である。それで、現時点での考えをまとめておく必要があると、強く感じたのである。

1

ブロンテ姉妹の故郷を訪れた者は、誰もが、あのように大都市から離れた片田舎から、百数十年過ぎた今なお、世界中の人びとに愛読されている小説家が、しかも、3人も出たことに、驚くであろう。

ペナイン山脈の山裾にある小都市キースリーから、さらに4マイル谷間の曲りくねった道に入り、高山こそないが、起伏の激しい山岳地帯の丘陵と谷に張りつくように、ホワースの町があり、姉妹が慣れ親しんだ教会と牧師館へ行くには、急斜面の狭い道を登らなければならない。その坂道を、シャーロットの伝記を書いたギヤスケル夫人は、つぎのように書いている。

Haworth is a long, straggling village : one steep narrow street—so steep that the flag-stones with which it is paved are placed end-ways, that the horses' feet may have something to cling to, and not slip down backwards ; which if they did, they would soon reach Keighley.¹⁾

今は「ブロンテ姉妹の故郷」として、教会や博物館となっている牧師館周辺は、夏こそ観光客でにぎわうものの、相変らず小さな田舎町に過ぎない。牧師館は教会の横を、さらに登りつめた、教会の裏手にあり、牧師館の裏に出れば、黒い岩があちこちに突き出た丘の斜面は、牧場になっていて、数頭の馬が広いことを幸い、勝手気ままに、今なお遊んでいるような所なのである。

しかし、逆説的だが、そうした場所であればこそ、3人の姉妹がそろって小説家になれたということもできる。これといった資産もない牧師の子どもたちは、文化果つるこの地にあっては、読書と空想、そして、荒野の散歩しか楽しむことがなかったのである。事実、ブロンテ姉妹と弟は、そうした。幼いうちに病死した長姉は、7才のころ、父のところに届けられる新聞をたんねんに読み、妹たちにそのニュースを話して聞かせたという²⁾。『聖書』は早くから慣れ親しんだものであることは、いうまでもない。『天路歷程』も、同時代の子どもたち同様、冒険物語として読まれた。当時、広く読まれていた怪奇小説、スコットやバイロンなども好んで読まれ、ウェリントン公はシャーロットのお気に入りの英雄だったという³⁾。また、父親が弟のために買って来た、木彫の12個の兵隊人形を勇士に見立てて、「アングリヤ」王国、「ゴンドル」王国などを架空に案出し、それらの王国にまつわる、さまざまな冒険物語を創造して、楽しんだという。楽しんだというより、空想の世界に生きたといった方がよいであろう。その証拠は、相当な分量の物語や詩となって残されている。

もちろん、片田舎に住んでいたことは、彼女たちが小説家になったことの、1つの付随的な、そして、偶然の条件に過ぎない。主たるものは父母から受け継いだ、強い意志を含めた才能と努力であろう。アイルランドの貧農の息子が、ケイムブリッジ大学を出て、牧師になることは、なみたいていのことではなく、悪条件を吹きとばす強い意志と才能があればこそできたことである。W. S. モームは、ブルジョワの感覚と文学的名声による優越感からか、姉妹の父の風変わりぶりを笑っているが⁴⁾、後世に名を残す文学者ではないにしても、詩文を草する趣味と能力を持っていたのである。モームも同じくケルトの血筋を引いていることは面白い。

また、自分の Brunty (または Branty) という姓を嫌い、ウェリントンに与えられた、Brontë 候の名にあやかり、Brontë に改めたのは、姉妹の父親の向上心の表れであろうか。故郷のアイルランドへは帰ろうとしなかったこと、妻子の華やかな衣裳や靴を、引き裂い

たり暖炉に投げ込んだりしたことが伝えられているが⁹⁾、これは彼の激しい気性と強い意志を示している。妻は叱られたことのないことを感謝してるといったといわれ⁹⁾、息子のブランウェルは唯一の男子として甘やかされたり、後年、ギヤスケル夫人に、運動のためシャーロットを外へ連れ出すことを頼んだり、伝記を書くことを頼んだりしているところを見ると、彼なりに妻子のことを考えていたのであろうが、口数少なく、社交下手なところへ、病気勝ちであったり、不幸が重なったりして、気難しくなったようである。母は、美人ではなかったが、明るく、よい性格を持ち、文才も多少あったといわれている⁷⁾。

ブロンテ姉妹にとって、牧師の子として生まれたことは、幸いであったろう。本の少ない時代に、分野は限られていたにせよ、身近に本のある環境は恵まれたものであった。財産がないことは、当時は大変不利な条件だったが、その不利な情況の正しい認識は、姉妹たちに自立への努力を強い、前進への起爆剤となったといえる。3人姉妹は、それぞれの性格に応じて、この不利な条件を乗り越えるために、家庭教師、画家、音楽家、塾経営者、詩人、小説家などになる道を模索したのであった。

また、ヨークシャーの風土も、姉妹の人格形成、そして、作品に大きく作用したことは間違いない。ある時、彼女たちの父が、子どもたちに自由な意見を言えるように、目隠しさせて、「最良の本は何か」と、聞いた時、シャーロットは、聖書とともに「自然」を挙げたという⁹⁾。この場合、もちろん、ヨークシャーの自然をさしている。6人の幼い子どもたちが、列を作って荒野を散歩する姿が見られたという。真夏でも肌寒いこともある、この土地は、冬ともなれば、まさに寒風吹きすさぶ、どこもかしこも、凍りついた白い荒野となる。『嵐が丘』の冒頭で、ヒースクリフに挨拶に来たロックウッドは、帰り時に吹雪に襲われ、一夜足止めされた。吹雪の荒野に出て行くことは、死を意味した。野生児ヒースクリフさえ、その恐ろしさを知っている。嵐が治まっても、「林の中に迷ったり、雪に首まで埋ったり」してしまう⁹⁾。交通の便は、ほとんどなくなり、すべての生物は、ひっそりと身を隠すように暮し、ただひたすら寒気の緩む春の到来を待たねばならない。その間に、厳しい寒さの繰返しに耐えられぬ者は、淋しくこの世を去らねばならない。その悲しみにも、この地方に住む者は耐えねばならないのである。こうした厳しい風土が、素朴で、忍耐強く、頑固で、激しい感情を胸中に秘めて、時にはそれが爆発を起す、ヨークシャー気質を形成している。

ブロンテ姉妹にも、多少の差はあれ、同じ特徴が見られたようである。3人とも、内気で、交際下手で、忍耐強く、なかなか自説を曲げない。エミリーは特に荒野を好み、人との交際を意図的に避けたい。病気が重くても、医者に見てもらうことを嫌い、いつも通りの生活を頑なに続けようとした¹⁰⁾。『嵐が丘』にも色濃く示されているように、ヒースの荒野をこよなく愛し、故郷を離れると体調をくずし、すぐ舞い戻ってこなければならなかった。それでいて、姉妹の命を縮めさせたのも、また、このヨークシャーの風土だった

のは、まさに、宿命という他はない。ブロンテ家には、ほとんど途絶えることなく、病魔が巣くい、シャーロット以外は、弟を含めて3人とも、30才になるかならぬうちに、この世を去っている。父もシャーロットも病氣勝ちで、父は長生きしたが、シャーロットは、39才の誕生日を目前にして、肺結核に侵されていた体は妊娠に耐え切れず、この世を去った。一家はヨークシャーの荒野に結びつき、ヨークシャーの土地に身を亡ぼされたといえる。

2

ブロンテ姉妹の短命とも無関係ではないが、交通の不便、女性であることも関係していたであろうか、とにかく、彼女たちの世界は狭い。広かろうはずがない。エミリーは1つ、アンは2つ、シャーロットは4つ（見方によっては3つ）の小説を書いたが、いずれも狭い世界からその題材が選ばれている。

多くの人が英国小説の最高傑作の1つに数える、エミリーの『嵐が丘』は、ヨークシャーの土壤に、彼女の生来の内に秘めた情熱と天才が植えつけられて、永遠の愛の物語が生れた。アンの『アグネス・グレイ』と『ワイルドフェル館の住人』は敬虔な心に家庭教師の体験や弟の乱れた生き様の深い観察を映すことによって生まれた。シャーロットの実質は3つの作品は、人見知りの強い、それでいて燃えるような自立心は屈辱に出会うごとに振り立ち、孤独感に押し潰されそうになりながら、激しく抵抗して道を開いて進んだ女性の独立の書である。しかし、たとえ彼女たちが長生きして、別の傑作が生まれたとしても、その題材は似たようなものから選択されたことであろう。事実、シャーロットの『ヴィレット』の後に草案を練っていた小説は、教師-生徒もので、夫のニコルズにからかわれた話が残っている¹¹⁾。

ブロンテ姉妹の関心が、弟の詩が地方紙に掲載されたことや塾経営の失敗などによって、小説の出版へと向っていった時、シャーロットは、それまでのロマンスや怪奇ものとは訣別し、実人生に目を向けるようになった。シャーロットの描く人物、出来事、心情には、ほとんどすべてに、その核となった素材がある。だからこそ、彼女は自分の書くものはすべて真実だと胸を張っていったのである。

作品としては、第2作目で、出世作となった『ジェイン・エア』についていえば、それまでの小説の女主人公はすべて美人であったのに、ジェインは美人ではない。それは現実感を与えるためのものであった。身分は高いどころか、孤児であった。しかし、聡明で、率直で、気品のある人物にした。それはなんら現実性を損うものではなかった。なぜなら、それらの性質は作者自身が持っていたものだからである。

ジェインが厄介払い同然に送り出されたローウズの慈善学校は、姉や作者が学んだカ

ウアン・ブリッジの学校で、無慈悲で自分勝手なブロックルハースト氏のモデルとなった人は存在し、実際に熱病事件も起ったことであり、その犠牲者の1人となった、哀れをさそうヘレン・バーンズは、早熟で聡明な長姉がモデルとなっている。やさしく、立派な教育者でもある校長のテンプル先生は、後に作者が学び、そして、教壇に立ったこともある学校のウーラー先生である。ジェイン・エアの、より広い世界への憧れは、老いて、病氣勝ちの父と乱れた生活をしている弟をかかえたブロンテ姉妹、特に、シャーロットの自立願望であり、女性の不利な立場の克服願望に他ならない。

美男ではないが、自分の確固とした考えを持ち、堂々として立派なロチェスター氏は、作者の接した数少ない男性を観察することと、願望から生れた男性像で、女性に対する無作法な言動や暗い過去の経験を負わせているのは、父や弟などから得たものであろう。ジェイン・エアの結婚は、ベルギーでの恩師エジェ氏に対する果せぬ恋の成就で‘Reader, I married him.’¹²⁾という、ジェインの歎声は、押えに押えてきた、作者自身の声であったろう。また、もう一人の求婚者であるセント・ジョンは友人の兄で、求婚の事実もあったという。

『ジェイン・エア』の赤い部屋での閃光や幽霊への恐怖、『ヴィレット』における、極光の導きとか、幽霊話とその出現は、作者の実感から出たものであろう。事実、シャーロットは幽霊に対して異常なまでの恐怖を示したことを、ギヤスケル夫人は書いている。したがって、ロチェスター氏の悲痛な呼び声が、物理的には全く不可能な場所で聞えたことは、この作品の欠点として指摘されることもあるが、作者にとっては、「真実」であったのだろう¹³⁾。

ジェインの親について、よい家柄の母が、貧乏牧師に恋をして、親の怒りにふれ、家を無一文で追い出されたとされているが、妹のアンも『アグネス・グレイ』において、同じような立場にある母を描いている。また、『教授』のクリムズワースの父母の結婚も身分違いの結婚である。これは偶然の一致などではなく、自分たちの父母の結婚がそうしたものであったのだ。父はアイルランドの貧農の出で、他人の援助と自分の強い意志で、29才で大学を卒業した貧乏牧師であり、母はコーンウォール地方の、やや良い家柄の商家の出で、2人の結婚は周囲から反対されたことは十分考えられる。

『シャーリー』についても、同じことがいえる。シャーリーは妹のエミリーが裕福な身分に生れた場合を想定して書かれたという。シャーリーを、よい身分にさせたのは、ジェインを金持のロチェスターと結婚させたことと無関係ではあるまい。金持の男性と貧しい女性の場合の結びつきより、なお一層困難な、裕福な女性と貧しい男性の結婚の例を示すことによって、身分上の障害を否定しようとしたのであろう。もちろん、現在の観点からすればそれは不十分なものであったろうが、当時の常識からすれば画期的なことであった。

この小説の背景となっているのは、ナポレオン戦争による経営危機に直面している紡績

業を機械化によって利潤を上げようとする資本家に対し、失業による生活苦におびえる労働者の実行行使による抵抗が生み出した社会不安、いわゆる、ラグイト暴動事件である。これは作者の故郷の近くでも起り、作者はその事件について周囲の人から聴いたり、自分で調べたりしたのである。革新的な工場主ロバートは、有名なカートライトをモデルにしているといわれ、彼にベルギー人の血が半分流れていることにしたのは、作者のベルギーへの関心の表れといえる。

そのロバートに対し、控え目に恋ごころを抱き、その失望感から重病にかかるキャロラインは、親友や妹のアンを原型としたものであるが、精神的には作者の分身で、当時の女性が置かれていた不安定な立場についての不満を代弁している。20世紀の小説家、ヴァージニア・ウルフも、その点について、『自分自身の部屋』や『3ギニー』などの中で、強く訴えている。キャロラインの、長く離別していた生みの母、ブライア夫人も、女性家庭教師の立場の弱さ・辛さを作品の中で訴えている。これはブロンテ姉妹の共通の、心の底からの訴えであったろう。

キャロラインがロバートに宛てて書いたが、出されなかった手紙は、作者がエジェ氏に出したものと同趣旨のものであるという。¹⁴⁾キャロラインの伯父、ヘストン牧師は労働者に批判的で、身の安全のためにピストルを持ち歩く、気性の激しい人であるが、直接モデルとなった人物もいるものの、作者の父もピストルを持っていて、乱射したこともあったという。¹⁵⁾作品の冒頭に出てくる、戯画化された、3人の牧師補たちにも、それぞれモデルがあったという。ヨーク家の人びとも、友人一家がモデルで、主人は大陸へよく行き、そこで見た外国文学の作品を作者は借りて読んだ。

シャーリーが、犬の喧嘩に素手で別け入り、犬に咬まれると、その部分に焼きごてをあてて消毒する場面も、実際に似た経験があったようである。また、原因不明の重病で苦しむことが、シャーロットの作品によく出てくるが、それは一家を絶間なく襲ってくる病気のせいであろう。この作品の執筆中に、作者は弟と2人の妹を、相ついで失っているのである。

3

同じことは、『教授』と『ヴィレット』という、ベルギー時代の経験を題材にした作品についてもいえる。前者はシャーロットが、2人の妹たちと出版を目ざして書いた第1作であるが、「地味である」こと、「短かすぎる」ことなどを理由に、数回出版を拒否されたものである。しかし、作者にとってはベルギー時代の思出は捨てがたく、改めて、『ヴィレット』として書き上げられた。そして、『教授』は、作者の死後、出版社の強い要請を受けて、作者の夫ニコルズ牧師によって出版された。したがって、両小説の類似素材は多い。

2作品の舞台となった場所は、『ヴィレット』においては名こそ違え、作者が留学したベルギーのブルッセル市である。『教授』においては、主要人物の男女の性をモデルの性と入れ換えているためか、または、現実味を増すためか、地名をそのまま使用している。一方、『ヴィレット』では、人物の性別をそのままに使っているためか、地名はラバスクール王国、ヴィレット市としている。両作品とも、主人公が身を寄せる学校は、作者が学んだ寄宿学校で、その位置、その建物も、かなり実物に近いという。

主人公は、『教授』においては男性、『ヴィレット』においては女性であるが、ともに英国から行った外国人で、多く作者と同じ立場にある。そして、男性主人公クリムズワースはベルギーの恩師エジェ氏、そして、弟の性格の一部を取り入れてると思われる。また、後半から中心人物となる、クリムズワースの相手フランシス・アンリにも、作者の心情が多く分与されている。

2作品の女子寄宿校の女校長は、年齢、独身と未亡人の差はあるが、身長はやや低く、小肥りで、かなり魅力的である。そして、両者とも、主人公の恋路を邪魔をする点は似ている。これは、エジェ夫人がモデルになっている。事実、夫人は『ヴィレット』においてベック夫人として描かれていることに、強い不満を示し、伝記作者のギヤスケル夫人が面談を申し入れても、応じなかったという。¹⁶⁾おそらく、表面穏やかだが、人をこっそり観察し、陰でこっそり不都合な人物を排除する、二重人格的描写や子どもに対する冷やかな態度しか示さない描かれ方に立腹したのであろう。この点は、『教授』においても、男子寄宿校のプレ校長も、表と裏のある人物として描かれているので、作者にとっては忘れがたい実感であったのであろう。もし、現実には、女子学生が教師である夫に対して好意を寄せていることを知った場合、妻としてはあからさまな咎めだてをして事をあら立てることもできず、そっとそれを阻止することはあり得ることである。しかし、当事者としては、その行動は、不快この上ないスパイ行為と感じられることであろう。プレ校長には、原型となった人物が実在したそうだが、ある部分は、エジェ夫人のものであったろう。また、エジェ夫人の名ゾーイと校長の名ゾライドとの類似は、よく指摘されることである。

他に、散歩と出会いの場所に使われた庭の存在、同僚教師の人物像、いたずら学生と彼女らに対する断乎たる処置（これは作者の内気とはいえ、激しい気性の一面をよく示している）、授業方法や内容、学校行事など、共通点が多い。また、主人公が受ける周囲からのさまざまな侮辱や不快、民族意識や生活感覚の違い、新教・旧教の宗教観の相違、言葉の問題、強い孤独感、などは、まさに、作者が留学中体験したものである。

両小説とも、女主人公は自分の塾、もしくは、寄宿学校を持つが、作者も、父の老化と病氣、弟の甘えと挫折感からくる生活の乱れ、そして、姉妹が屈辱を味わうことなく自立することを願う気持から、一時期真剣に塾の経営を実現すべく努力したのであった。ベルギーへの留学もその準備のためであった。

『教授』において、恋を妨げるため、長期欠勤を理由に学校を解雇され、生活の手段を奪われたフランシス・アンリを求めて、クリムズワースがやっと彼女を見つけ出した墓地は、作者の友人の妹が病死して、埋葬された墓地である。また、フランシスがクリムズワースを慕って書いた詩は、作者がエジェ氏を思いつつノートに書きとめた詩が元になっているという。¹⁷⁾ところで、この主人公のクリムズワースという名は、作者の知っている谷の名から採用したものである。

『ヴィレット』の初めの3章に出てくるポリーのあどけない姿は、あまり子ども好きではない作者が、ギヤスケル夫人の子どもを知ることから生れたという。また、ブレトン夫人と息子のジョンは、作者の作品の出版に力を入れ、また、作者に結婚を申し込んだことのある、スミス氏母子であることは、スミス氏自身も認めていることである。作品の中で、ブレトン夫人が急に女主人公を呼んで、新しい衣裳まで揃えて、観劇に誘った場面があるが、『ジェイン・エア』の出版後、初めて、ロンドンの事務所を訪問した折に、スミス氏が妹たちともども、作者とエミリーのホテルに馬車で乗りつけて、否応なしに観劇に連れ出したことがあったという。¹⁸⁾また、女主人公が大陸へ旅立つ前にロンドン見物をし、伯父が利用していたホテルに投宿するが、作者らがベルギーに渡る時は、父親がついてきたという、父の利用したホテルであったのだろう。

『ヴィレット』の長所の1つである、ポール・エマニュエル教授の人物像は、いうまでもなく、エジェ氏から得ているであろう。女主人公は、初めは、あまり好感を持たず、後に急激に好意を持つが、人を好きになるのはそのようなものかもしれない。作者は女性に対しては厳しい目で観察することはよく言われるが、男性についても大部分は厳しい目で見るのではなかろうか。また、最後の部分で、エマニュエル教授が、女校長と神父の計りごとの結果、西インド諸島へ行くのに乗る船は「ポール・エ・ヴィルジニー号」である。これは、フランスの小説家ド・サン・ピエールの『ポールとヴィルジニー』の名を使っている。また、女主人の名は、スノウ→フロスト→スノウに変わったという。作者の意図は、主人公に日の光をあてるのではなく、風に舞い、吹き飛ばされる運命を暗示することであつたらう。

以上、シャーロット・ブロンテの作品の題材の現実への密着性について述べてきたが、彼女の小説即ち事実、自伝小説というつもりはない。事実の合成、想像に依る所も多い。事実の混合としては、エマニュエル教授の市の記念行事における講演で、女主人公に感想をたずねるが、これはサッカーが作者に対してとった行動であるという。¹⁹⁾想像力に依る例は、列挙するまでもない。シャーロットは体験してないことでも、じっと考えると場面が浮んで来るという。それは小説家としての才能に他ならない。小説家は、アリストテレスの言葉を引用するまでもなく、読者に本当らしく思わせることができればそれで目的は達せられる。

4

『教授』と『ヴィレット』の2作品は、先述のごとく、類似の部分は多い。それは作者の創作態度においても同じである。作者が『教授』を書いた基本的な方針は、作品の中で明確に示されている。

Novelists should never allow themselves to weary of the study of real life. If they observed this duty conscientiously, they would give us fewer pictures chequered with vivid contrasts of light and shade; they would seldom elevate their heroes and heroines to the heights of rapture—still seldomer sink them to the depths of despair; for if we rarely taste the fulness of joy in this life, we yet more rarely savour the acid bitterness of hopeless anguish;……²⁰⁾

また、主人公の人物像についても、はっきりとした方針があった。『教授』につけられている「まえがき」で、つぎのように書いてある。

…I had got over any such taste as I might once have had for ornamented and redundant composition, and come to prefer what was plain and homely.²¹⁾

「かつて持っていたような好み」とは、スコットの小説のような、波乱万丈のロマンス類を指し、そこから実人生に向った事が分る。

I said to myself that my hero should work his way through life as I had seen real living men work theirs—that he should never get a shilling he had not earned—that no sudden turns should lift him in a moment to wealth and high station; that whatever small competency he might gain, should he won by the sweat of his brow; that, before he could find so much as an arbour to sit down in, he should master at least half the ascent of “the Hill of Difficulty”; that he should not even marry a beautiful girl or a lady of rank.²²⁾

この「まえがき」は、『シャーリー』が出版されたあと、再度『教授』を出版することを目ざして、書いたものである。従って、つぎの作品『ヴィレット』においてもあてはまるものと考えてよい。『教授』はもとより、シャーロットの全作品について、自分と同じく、

自立する人、もしくは、自立を望む人を描こうとしたのである。この点でも、『教授』と『ヴィレット』は共通するものを持っている。

『教授』は先述のとおり、出版を数回拒否された作品で、ある出版社が示した理由は、「地味」で、「短かすぎる」というものであった。当時、小説は3巻本で出版されるのが普通であったが、短か過ぎるというのは口実であったろう。妹の안의『アグネス・グレイ』も、決して長いものではない。やはり、「地味である」ことが、主な理由であったろう。それは、つぎの『ジェイン・エア』が、主人公を女性にし、ロマンスの要素、怪奇小説的要素を取り入れることによって、大成功したことによっても分る。世間では、作者が目指しているより、もっと娯楽性、冒険性、活劇性、ユーモアや諷刺を求めていたのである。果して、作者の死後出版された『教授』は、その出版直後に出た書評には、もっとも出来の悪い作品と書かれた。²³⁾

この作品は、男性を主人公にし、1人称で語られている。これは、それに先立つ詩作において、女性であることを隠し、カラ・ベルの名を使ったのと同じ理由であったろう。当時、多少の先例はあったものの、女性はまだ小説家の仲間入りすることに、世間の抵抗があり、女性であることを隠した方が有利と判断したのであろう。また、ベルギーでの体験が多く取り入れられているので、時間的へだたりも少ないことから、自分も含めた当事者達への影響を弱める意図があったのだろう。

ゲリンはつぎのように考えている。男性を主人公に選んだのは、作者が訣別したはずの「アングリア」王国などの継続であり、そのクリムズワースは弟のブランウェルを写しただけのもので、すべてが未熟であるという。それを、作者が新しく創造した人物像アンリと対照させることは、小説を分裂させているという。また、兄弟の敵対も、何度も取り扱われたもので、幼いブロンテ姉弟の口論を原型にしたものに過ぎないという。²⁴⁾

確かに、兄の弟に対する反感には、動機が理解しにくく、ただ実利的な兄とロマンティックな弟の対立という形を安易に利用しているふしはあるが、自分の肉親から離れて外国暮らしをする理由としてはかなり納得のゆくものであろう。また、「自分の手で運命を切り開いてゆく」主人公の性格づけに役立っている。

しかし、一般読者にとって魅力的かということになると、『ジェイン・エア』の冒頭部分にはかなわない。男の出世物語や戦の物語なら、他に雄大で、変化に富んだものがある。世間が求めているのは、『骨董店』のネリーや『小さなドリット』のドリットなのである。また、冒頭を手紙形式にしたのも、説明が多く、重たく感じる。また、手紙をあてた級友の存在の必然性は希薄であり、手紙を出さなかったのも、そのあとを一般の人に語るというのも、やや不自然である。

また、男性の主人公に1人称で語らせたことは、女性である作者の内面を十分表現することを妨げたといえる。作者は周囲にいる少数の男性を観察して得た知識しかない。男性

に女性の心理を十分代弁させることは不可能であり、だからこそ、作者を代弁するアンリの登場が必要となり、後半はそこに重点が移された。その結果、作者の訴えたいものは分割減退したことは否定できまい。ゲリンのいう「分裂」とは、この意味であろう。また、それが、『ヴィレット』の場合と比べると、愛の苦悩の深さは比較にならないといわれる理由であろう。²⁵⁾また、作者がエジェ氏に抱いた愛は、いわば、不倫の愛で、それだけ苦悩が深かったはずだ。しかし、クリムズワースとアンリの場合は若者同志の清純な愛であり、愛の成就の障害は、女校長の嫉妬心にすぎなかった。この点でも、悲愴感はさほど深刻なものになり得なかったといえる。

さらに、主人公を男にしたために、作者が味わった職を得るための苦労は、さほど深刻なものにはならなかった。名門校を出てる上に、ハンズデンのようなトリックスター的人物によって、人生の節目ごとに助けられ、万事主人公に都合よく展開する。それが具合が悪くなると、突然、かって学生の命を助けた話を持ち出し、その親の力で、好条件の地位をいとも簡単に得られるというのは、どうも話がうますぎる。

ジェイン・オースチンならば、人物を行動させつつ、自ら状況を読者に伝えてゆくのに対し、『教授』では、概括的に説明してしまう場合も多い。例えば、第10章において、いたずら学生について必要以上に詳しく容姿来歴を説明で済ませている。第12章では、主人公の女性親の変化を説明で片づけている。また、主人公夫婦の憧れの地、英国、での生活の説明によっているので、余分なつけたしの感じが強い。

また、登場人物の誰でもない、作者自身の感慨を述べている部分もある。

Belgium! name unromantic and unpoetic, yet name that whenever uttered has in my ear a sound, in my heart an echo, such as no other assemblage of syllables, however sweet or classic, can produce. Belgium! I repeat the word, now as I sit alone near midnight. It stirs my world of the past like a summons to resurrection ;……²⁶⁾

遠い昔、ベルギーに渡り、多少苦労の末、結婚相手を見つけて母国へ帰った男の言葉としてはどうであろうか。まだ、若くて、多くの魅れんと悩みを残してる者の発する言葉ではないだろうか。また、第19章の冒頭の 'Novelists should never allow themselves to weary of the study of real life.' の言葉も小説家ならぬ語り手が発する言葉ではあるまい。これは作者自身の自戒の言葉に他なるまい。

こうした欠点を『ヴィレット』も完全に脱しているわけではない。語手のルーシーによって、かろうじて統一は保たれてはいるものの、物語は断片的で、また、偶然の力に多くを頼っている。

D. セシルは、ベルギーと思われる、ラバスクール王国で、困っている時に助けてくれた男性が、少女時代世話になった家の息子であったのはよいとしても、夏期休暇中の孤独感に耐えかねて外出して、行き倒れた時、助けてくれたのも彼で、また、その母が数日間世話をしているながら、数年前に別れたルーシーが見分けられないとなると、信じられなくなるという。²⁷⁾確かに、その上、劇場の火事騒ぎで助けた若い女性が、あの幼いポリーであったのは、出来過ぎのようである。

また、ウォルター・アレンは、女主人公があまりに因襲的道德にとらわれ過ぎていて、学校劇に男役を演ずるにあたって、男装を拒み、上着はともかく、下はスカートをつけるのは馬鹿げていると指摘する。また、ジョン・ブレトンが軽薄なフランシヨーに夢中になることや、フランシヨーと別の男の秘密、即ち幽霊騒ぎの原因となった行動は、読者を納得させるものではないといっている。²⁸⁾

しかし、それらの欠点にもかかわらず、『ヴィレット』を、G. エリオットもよい作品と賞讃している。²⁹⁾

冒頭の3章は主人公ルーシー・スノウが、少女時代に身を寄せていたことのある、名付親の家で、同じく一時預けられていた幼女ポリーのあどけない姿が描かれている。それ自体は可愛らしいが、主人公はここではただの傍観者にすぎない。それで、この部分を欠点と指摘すること可能だが、初めの部分を本筋の舞台とは別の場所を示すのは作者の常套手段で、後の再会の場面の展開のためのもので、主人公を無色透明の性格にすることは、むしろ作者のもくろみであったのだろう。

その後、ルーシーは、原因は不明確だが、財産も、縁者を失い、自分の生活を自分で支えていかねばならない立場におかれる。そして、病人の世話をして数年を過すが、その病人の死によって働き場所を失い、運命の導くままに、ロンドンへ、大陸へと流れてゆく。作者のベルギー行きは、目的も、行先も十分考慮した上で実施されたのであるが、ルーシーの場合はあてのないもので、ロンドンへ行くのも、大陸行きの船に乗るのも、ラバスクール王国へ行くのも、ヴィレット市の寄宿校に行くのも、また、そこで職を得るのも、すべて成り行きまかせの結果である。

運命の流れに流されてきた主人公は、ヴィレット市の女寄宿校という杭にひっかかり、ここでやっと新しい生活が始まる。この学校は、未亡人校長、ベック夫人の、表面は穏和で裏面はスパイまがいの監視と陰険で実利的な決断によって、維持経営されていた。主人公は校長のやり方に不快感を禁じ得なかったが、他に生活手段がなかったため、校長の実利主義に便乗して、子守役から英語教師へと転進する。そして、その間、校長、同僚、学生から影響を受けて、徐々に、自分の存在を明確化してゆく。

夏期休暇中、白痴の生徒と学校に残された主人公は、深い孤独に襲われて、外出した折に行き倒れ、ブレトン母子に助けられる。この部分、ジョンとはもっと早くかわりがあ

り、主人公には分っていたが黙っていたというのはやや不自然であろう。この後ジョンとの親交は進むが、ジョンに好意を持つ女校長とルーシーに興味を持つエマニュエル教授の嫉妬から、いろいろな妨害を受ける。しかし、ジョンの関心はフランシヨー、そして、ポリーに向けられることで、主人公はその人柄の浅さを知り思い切る。一方、エマニュエル教授の過去と人柄の秘密を知ることにより教授への関心が急速に高まる。この部分の、2人の男性を同時に愛すること、もしくは、心変りをサッカーはふしだと感じたのは、いかにもヴィクトリア朝的感覚であるように思う。³⁰⁾

しかし、またも女校長の嫉妬と教授の恩師である神父の宗教上の反対に出会い、陰謀がめぐらされる。これは、今はもう逞ましく成長した女主人公と同じく意志の強い教授によってその障害は除かれ、教授の外国行きは避けられなかったが、愛は確められ、再会を約して教授によって準備された塾の経営を引き受ける。3年後学校経営はうまくいったが、運命のいたずらで、教授の船が遭難して、2人の再会が不可能であることが暗示される。

作者はこの作品によって人生を表現したかったのである。始めもなければ、終りもない、不確実な人生を、一女性の体験を通して語りたかったのである。もちろん、ルーシーは作者を代弁している。『教授』のアンリが、あくまでもクリムズワースの目を通して、その孤独や苦悩が語られているのに対し、ルーシーの場合は、孤独感、不安、苦悩、感情の吐出、愛、すべて直接に読者に訴えているので、それは力強いものになっている。

... I said, 'I really believe my nerves are getting over-stretched: my mind has suffered somewhat too much; a malady is growing upon it—what shall I do? How shall I keep well?'

Indeed there was no way to keep well under the circumstances. At last a day and night of peculiar agonizing depression were succeeded by physical illness, I took perforce to my bed. About this time the Indian summer closed and the equinoctial storms began; and for nine dark and wet days, of which the Hours rushed on all turbulent, deaf, dishevelled—bewildered with sounding hurricane—I lay in a strange fever of the nerves and blood. Sleep went quite away. I used to rise in the night, look round for her, beseech her earnestly to return. A rattle of the window, a cry of the blast only replied—Sleep never came! I err. She came once, but in anger. Impatient of my importunity she brought with her an avenging dream. By the clock of St Jean Baptiste, that dream remained scarce fifteen minutes—a brief space, but sufficing to wring my whole frame with unknown anguish; to confer a nameless experience that had the hue, the mien, the terror, the very tone of a visitation from eternity. Between twelve and one that night a cup

was forced to my lips, black, strong, strange, drawn from no well, but filled up seething from a bottomless and boundless sea. Suffering, brewed in temporal or calculable measure, and mixed for mortal lips, tastes not as this suffering tasted. Having drank and woke, I thought all was over: the end come and past by. Trembling fearfully—as consciousness returned—ready to cry out on some fellow-creature to help me, only that I knew no fellow-creature was near enough to catch the wild summons—Goton in her far distant attic could not hear—I rose on my knees in bed. Some fearful hours went over me: indescribably was I torn, racked and oppressed in mind. Amidst the horrors of that dream I think the worst lay here. Methought the well-loved dead, who had loved *me* well in life, met me elsewhere, alienated: galled was my inmost spirit with an unutterable sense of despair about the future. Motive there was none why I should try to recover or wish to live; and yet quite unendurable was the pitiless and haughty voice in which Death challenged me to engage his unknown terrors. When I tried to pray I could only utter these words: -

‘From my youth up Thy terrors have I suffered with a troubled mind.’
Most true was it.³¹⁾

‘No!’ I said, ‘neither you nor another shall persuade or lead me.’

.....

‘Madame,’ I broke out, ‘you are a sensualist. Under all your serenity, your peace, and your decorum, you are an undenied sensualist. Make your own bed warm and soft; take sedatives and meats, and drinks spiced and sweet, as much as you will. If you have any sorrow or disappointment—and, perhaps, you have—nay, I *know* you have—seek your own palliatives, in your own chosen resources. Leave me, however. *Leave me*, I say!’

‘I must send another to watch you, mees; I must send Goton!’

‘I forbid it. Let me alone. Keep your hand off me, and my life, and my troubles. Oh, Madame! in *your* hand there is both chill and poison. You envenom and you paralyze.’

‘What have I done, meess? You must not marry Paul. He cannot marry.’

‘Dog in the manger!’ I said; for I knew she secretly wanted him, and had always wanted him. She called him ‘insupportable;’ she railed at him for a ‘devot;’ she did not love, but she wanted to marry, that she might bind him to her

interest. Deep into some of Madame's secrets I had entered—I know not how ; by an intuition or an inspiration which came to me—I know not whence. In the course of living with her, too, I had slowly learned, that, unless with an inferior, she must ever be a rival. She was my rival, heart and soul, though secretly, under the smoothest bearing, and utterly unknown to all save her and myself.

Two minutes I stood over Madame, feeling that the whole woman was in my power,.....³²⁾

あの無色透明で、消極的な性格であったルーシーは、今やベック夫人と対等に立ち向い、さらに夫人を支配下におく女性に成長したのである。その成長を彼女の、4度の幽霊に対する態度の変化によって指摘する研究者がいる。³³⁾それは正しい指摘であろう。

『ヴィレット』が書かれた時は、作者が女性であることは、もはや、世間周知の事実であり、隠す必要は少しもなかった。当時作者がおかれていた情況は、出発の時点より、別な意味で、もっと追い込まれていたものであり、周囲の人びとへの配慮する余裕もないものであったろう。弟妹3人をつぎつぎと失い、盲目に近い老父をかかえ、自らも病氣勝ちで、前途に明るいものは見られなかった。当時の作者の生活は他人が驚ろくほど暗澹たるものであった。その間彼女を支えたのは、ベルギーの想出であり、その体験は作者の頭の中で長い間、練り上げられた。だからこそ、その小説は個人名ではなく、『ヴィレット』という地名なのであり、万感の思いがそこに込められているのである。

また、『ジェイン・エア』、『シャーリー』を出版した経験は、作者に内部にあるものをどうすれば一番よく表現できるかを教えていた。

You will see that 'Villette' touches on no matter of public interest. I cannot write books handling the topics of the day ; it is of no use trying. Nor can I write a book for its moral. Nor can I take up a philanthropic scheme, though I honour philanthropy ;...³⁴⁾

その上で、今度は、女性を主人公とし、1人称で語ることを最善の方法として選んだのである。この作品は、作者の自己救済のためのものであったから、自分の過去を総括する意味でも、主人公は作者の分身である若い女性以外にはあり得なかったといえる。作者が途中何度も挫折しそうになりながらも、完成させることができたのは、自分自身の苦しみをルーシーに託することができたればこそ、のことなのである。完成後、自分の内部にあるものが、十分表現できたか心配しているが、自分の苦しみをルーシーに負わせることができたか心配しているのである。この書を作者のスケイプゴートというのは正しい。

シャーロットは、この作品を書くことによって救われた。自分自身を知ったのである。

ジェイン・エアは、この上なく望ましい家庭教師の地位を得ても、すぐもっと望ましいものを求めて、館の窓から遠い地平線の彼方を見つめた。³⁵⁾ アンリも、その前の不安定な地位より、はるかによい職を得たが、夫のクリムズワースが教授として高給をとっているのと比べると、今の仕事が物足りなくなり、自分の学校を持つことを望んだ。³⁶⁾

しかし、ルーシーは満足することを知ったのである。

I suppose, Lucy Snowe, the orb of your life is not to be so rounded; for you the crescent-phase must suffice. Very good.……I find no reason why I should be of the few favoured.³⁷⁾

ルーシー同様、作者も満足することを知った。ルーシーが、ジョンを見限り、エマニュエル教授を愛したごとく、シャーロットも、夫としてニコルズ牧師を選び、父を説得した。その結果は、反対していた父親にとっても好ましいものであった。シャーロットは、長い苦しい航海を終えて、港に入った船のような平和と安息を得た。

Papa has taken no duty since we returned; and each time I see Mr. Nicholls put on gown or surplice, I feel comforted to think that this marriage has secured papa good aid in his old age.³⁸⁾

We are all indeed pretty well; and, for my own part, it is long since I have known such comparative immunity from headache, etc., as during the last three months. My life is different from what it used to be. May God make me thankful for it! I have a good, kind, attached husband; and every day my own attachment to him grows stronger.³⁹⁾

5

『教授』については、いろいろ欠点は指摘できよう。出版を急ぐあまり、まだ熟してない経験を題材にした、題材の影響力を恐れて無理な方法をとってしまった、腕が未熟であった、説明が多くなり展開が重くなった、重点が分裂してしまった、など、など。

しかし、長所もまた認めねばならない。自分の力で生きてゆく主人公を登場させたこと、人生に密着した手法を採用したこと、D. セシルは情熱を題材にしたと知っているがそれは『教授』において、もう始まっている。また、自立する女性の人物像を中心の位置においたことも、この作品で始まっている。ブロンテ姉妹の共通の功績といえよう。人生に対

して、誠実であり、正直な態度もここに示されている。

『ヴィレット』では、『教授』の長所がなおいっそう強められている。ウォルター・アレンは、シャーロットの関心は1つだけで、それは、「人生の経験に対して最大限の強烈さで反応する、孤立した裸の魂を描き出すことである。」⁴⁰⁾といている。それは自立しようとする女性の、「内面の書」であり、「孤独の書」であり、「自己救済の書」である。シャーロットは、激しい情熱を内に秘めて、人生に正直に立ち向った。V. ウルフは情熱が彼女の作品を損っているといったが、同じ口で、彼女の作品は「詩」だといっている。時としてシャーロットの情熱は構成を忘れさせるが、その情熱が詩となっているのである。V. ウルフはその卒直さが、うらやましかつたに違いない。シャーロット・ブロンテは『ヴィレット』によって、女性の内面意識を力強く、正直に示した。それは、ジェイン・オースチンについても言えることだが、シャーロットの場合はまさに生きた女性の叫びであることにその価値があるのである。

Notes :

- 1) Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, (London : Everyman's Library, 1982) p. 384.
- 2) *Ibid.*, p. 35
- 3) *Ibid.*, p. 35
- 4) W. S. Maugham, *Ten Novels and their Authors*, (London : Heineman, 1978) p. 204
- 5) Gaskell, *The Life*, p. 31
- 6) *Ibid.*, p. 32
- 7) *Ibid.*, p. 24
- 8) *Ibid.*, p. 36
- 9) Emily Brontë, *Wuthering Heights*, (New York : Houghton Mifflin Co., 1931) p. 35
- 10) *The Life*, p. 256
- 11) 青山誠子, 『シャーロット・ブロンテの旅』(東京: 研究社, 1984) p. 228
- 12) Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, (New York : Houghton Mifflin Co., 1931) p. 289
- 13) 青山, p. 116
- 14) 山脇百合子 『ブロンテ姉妹』(東京: 英潮社, 1978) p. 81
- 15) *The Life*, p. 31
- 16) 山脇, p. 30
- 17) 青山, p. 73
- 18) *The Life*, p. 249
- 19) *Ibid.*, p. 335
- 20) Charlotte Brontë, *The Professor*, (New York : Houghton Mifflin Co., 1931) p. 166
- 21) *Ibid.*, Introduction
- 22) *Loc. cit.*
- 23) 青山・中岡編 『ブロンテ研究』(東京: 開文社, 1983) p. 17
- 24) 山脇, p. 126
- 25) *Ibid.*, p. 128
- 26) *The Professor*, p. 53
- 27) デイヴィッド・セシル 『ヴィクトリア朝初期の作家たち』(富士川和男他訳)(東京: 開文社, 1983)

p. 141

- 28) ウォルター・アレン『イギリスの小説』(和知誠之助他訳)(東京:文理, 1977) p. 256
- 29) 山脇, p. 114
- 30) *Ibid.*, p. 98
- 31) Charlotte Brontë, *Villette* I, (New York: Houghton Mifflin Co., 1931) pp. 200—201
- 32) *Villette* II, pp. 251~252
- 33) 青山, p. 208
- 34) Thomas James Wise et al. ed., *The Brontës, Their Lives, Friendship, and Correspondence*, (Philadelphia: Porcupine P., 1980) vol. 4, p. 14
- 35) *Jane Eyre*, p. 138
- 36) *The Professor*, p. 261
- 37) *Villette* II, p. 140
- 38) *The Life*, P. 397
- 39) *Ibid.*, p. 397
- 40) ウォルター・アレン, p. 258